

作者不明の西洋画、北斎作だった オランダの博物館に

2016年10月23日18時37分



日本橋を描いた作品。奥には江戸城と富士山が描かれている＝オランダ・ライデン国立民族学博物館所蔵



雪が降る増上寺と赤羽橋を描いた作品＝オランダ・ライデン国立民族学博物館所蔵

江戸時代にドイツ人医師・シーボルト（1796～1866）が日本から持ち帰り、作者がわからなかった絵画6点について、所蔵するオランダの博物館の研究者が、浮世絵師の葛飾北斎（1760～1849）の作品だと22日に発表した。目録に「北斎が西洋画の技法で描いた」とのシーボルトの記述があったという。

オランダのライデン国立民族学博物館のシニア研究員、マティ・フォーラーさん（67）が、長崎市であった国際会議で発表した。6点のうち5点は和紙に描かれ、博物館が現物を所蔵。雪がしんと降り積もる増上寺や、江戸城、富士山を望む日



本橋など江戸の情景が水彩で描かれている。あとの1点は石版画。

作者がわかっていなかったが、フォーラーさんが、シーボルトの子孫が所蔵する目録を2014年に確認したところ「北斎が西洋画の技法で描いた」とシーボルト自身による記載があった。フォーラーさんは「西洋人が描いたものと思っていたので驚いた」と話す。

フォーラーさんによると、日本画は輪郭を描き、色を付ける手法だが、これらの作品は、直接色を付け、遠近法も採用。水面に映る月明かりや建物など日本画では描きにくい表現もあり、「すばらしい作品」と評価した。

当時、長崎にあったオランダ商館の館長が北斎に作品を依頼したこともあり、フォーラーさんは、北斎が西洋画の技法で描いた背景にはそうした交流があるとみる。「(シーボルトらが江戸での滞在先としていた)長崎屋で北斎が西洋画を見て『自分もできる』と思ったのでは」と推測。「北斎は時代によって違うものを描いた。今回、北斎の新しい一面がわかった」と話している。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.